ダブル

ケイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダブル

【Ｎコード】
Ｎ９４１７Ａ

【作者名】
ケイム

【あらすじ】
とにかく笑いを重視した物語にするつもりです。連載物なので粘り強く書いていこうと思います。彼らの友情を是非最後までお付き合いくださいｍ（__）ｍ

第0話ー紹介ー

俺の名は赤羽伸（あかはねしん）。周りからは伸と呼ばれている。顔はまぁ平均レベル。運動はそこそこ得意で勉強はテスト前に復習をするぐらいのオールベーシックな高校三年生。

俺が言うのもなんだが、俺の周りには変人が多い。

青木楓（あおきかえで）。俺の幼なじみ、知能明晰で運動神経は陸上の短距離を専行していればオリンピックも夢じゃないと言われた程だ。こんな名前だが男である。しかしながらその容姿は絵に書いたような美少年。髪も長く、女に間違えられるのは日常茶飯事だ。

そんな楓の夢は宇宙人を捕まえることである。それも極度の真剣さである。彼にとって宇宙人こそが自分の生き甲斐であり、生活なのだ。そんな男と腐れ縁なのだから毎日が疲れる。

言葉使いもおかしい。自分のことを

「我」

と呼び、俺のことを

「少年」と呼び、女の子のことを

「女子」

と呼ぶ。学校を

「スクール」

と言ったり、キスのことを

「接吻」

と言う。言葉使いが本当におかしい。

しかしその変人マイナスファクターなんて彼の容姿や頭脳、運動神経の前では小さなマイナスにしかならない。

彼のその余りある才能に嫉妬する輩は多いが、彼の人柄はその嫉妬さえも羨望の眼差しに変えてしまう。

そんなスーパーマンが俺の幼なじみの楓だ。

そしてもう一人の幼なじみ、高風夏花（たかかぜなつか）。あまり大きな声では言えないが俺の彼女である。

幼いころからずっと一緒に（楓も）いたので自然と付き合うことになった。

自分でいうのもなんだが、可愛いと思う。頭も良く、何故俺と付き合っているのか疑問視する野郎が多い。

しかしながら夏花にも欠点がある。裏表が極端にすごいことだ。簡単に言えば俺に対してだけ言葉使いが変貌する。彼女いわく

「伸は話やすい」

だそうだ。俺の立場も考えて欲しい。

そして最後が、黒峯右京（くろみねうきょう）。右京とは高校に入ってからの親友だ。こいつも楓と同じようなパーフェクト人間だ。

顔はスカウトが来るぐらい格好良く、モデルのように足が長く、サッカー部の主将で貴公子と呼ばれているほど実力がある。少し口は

悪いがそれも女の子からしてみたらカッコイイのであろう。

しかしながらこいつにはどんな食物にもマヨネーズをかけるというポリシーがある。アンチマヨネーズの俺は右京と一緒に飯を食べる時は鼻をつまみ、右京がいない方向を見て飯を食べる。見ていると気分が悪くなるからだ。

普通の俺を含めたこの４人は今では学校の名物だ。

それもそのはずだ。俺以外の３人はとにかく目立つ。

楓、右京、夏花はそれぞれファンクラブが存在し、学年の行事事ではとにかく目立つ。俺はこの３人と共に行動しているだけなのだが、学校で俺のことを知らないのは、不登校者か入院している奴ぐらいだろう。

俺に平穏な日々は来るのだろうか？いやそれは日本が沈没するぐらい可能性は薄いことだと思うが。。

第1話ー毎朝ー

ピンポーン

「おはよう少年♪」

その声は透き通るようなソプラノ音で、まるで女の子かと聞き間違える程だ。

「すまん、ちょいと待っててくれ」

「了解した」

現在朝の8時15分。ここから学校まで歩いて15分。授業が始まるのが8時30分。イコール、プラスマイナス0。誰もが解ることなのだが、いつも遅刻ギリギリなのだ。

もし俺がこの変人と友人ではなかったら、毎日が遅刻デーであろう。

俺の両親は共に海外に出張に出ているので、家には俺と妹の二人暮しだ。しかしながら妹は俺と違ってしっかり者なので小学校から続く無遅刻無欠席の大記録を継続しているのである。

そんな妹の翼(つばさ)は毎朝お兄さまを無視してさっさと学校に行ってしまう。

そんな家庭事情も伴って、毎朝が戦いなのだ。
それを知っている楓が、俺が不敏であろうということで、毎朝欠かさず俺を迎えに来てくれる。
「悪りぃ、待たせたな」
「うむ、いつもより約2分25秒程の遅れだな」
サラっと楓が言った。いつも俺が出てくる時間を何分早いだの遅いだのと言うのだ。
「お前なんでいちいち俺が出てくる時間を毎日計ってるんだ？」
「愚問だな少年よ」
楓は鼻で笑うとワンテンポ置いて言葉を発した。
「我は、少年がその日に家から出てくる時間を知ることによって、少年の微妙な体調の変化を知ることができるから数秒単位で計っているのだ！」
楓は一呼吸で休む事無く言った。目は真剣で、笑いなど一切入っていない純粋な瞳だ。
「さよですか」

俺はそう言うと何事もなかったかのように学校に向かって歩みだした。

「いわゆる放置プレイと言うやつか少年？いつの間にそんな趣味を持ったのだ？」

「人に聞かれると誤解されるだろう！さっさと歩け」

俺はそう強く言うとまた歩みだした。毎日がこんな感じだ。楓のそのキャラは未だもって解読不可能なのだ。

「了解した」

楓は満面の笑顔と共に俺の横に着いて、同じ速度で学校への道程を共に歩みだした。。

第2話ー登校ー

「光は何故存在の対極である影を持つのかぁ」

背後から不意に声がした。その声はやや低音で、いつもの聞き慣れた声だ。

「おはよう同志よ♪」

「朝から恥ずかしくないのか？」

「昨日のテレビから引用したんだが、見たか？探偵野良猫物語」

「ってアニメじゃねぇか」

俺は間髪いれずに突っ込んだ。この光景はいつものことだ。

「突っ込みが甘いな伸君」

ニヤリと笑う右京。学校へ向かう途中は大抵、楓と右京が俺の横にセットで付く。どこぞのファーストフードのように。

「探偵野良猫物語なら我も見たぞ！」

そして大抵右京の話に乗っかるのが楓だ。

「昨日はカツオブシ連続盗難事件の解決編だったからな、標準で録画しちまったぜ」

そして大抵二人の世界が始まる。他から見れば真剣に語るイケメン二人。中身はアニメを語る変人二人。

「我は昨日6回も見てしまったよ。久々に聞いた名ゼリフを聞きたいためにな！」

その名ゼリフこそが右京が挨拶代わりに発した言葉だ。

ちなみにこのアニメはお子様向きのアニメである。今の小学生でも見ないであろう。しかしながら、この二人はグッズを買うほどこのアニメの大ファンである。

しかも話には続きがある。二人がこのアニメを好きという情報が学校中に広まり、次の日には俺以外の生徒が探偵野良猫物語を見たという伝説がある。

それほどまでに二人の存在が大きいのだ。

「犯人がまさか黒美ちゃんだったのはさすがに解らなかったよ」

「ああ、巧みに伏線を張っていたからな。我はとても感動した」

「やっぱり探偵野良猫物語は最高だ！」

ようやく話に区切りがついたようだ。

「そうだ、放課後暇かなお二人さん？」

そう発したのは右京だった。

「我は問題ない」

「ああ、暇っちゃ暇だが内容によるな」

「服を見に行くんだがどうだ？」

「我もちょうど夏物の服が欲しかったところだ」

「チョコパフェで手を打とう」

俺はニヤリと笑いその取引をもちこんだ。

「オーケー。なら夏花ちゃんも連れてこいよ」

「とりあえず聞いておく」

話がまとまると、ちょうど道は目的地である学校についた。

「今日も一日がんばりますか」

右京がそう言うと、駆け足で校門を抜けグランドを駆けていった。

第3話ー挨拶ー

「右京様おはようございます」

そう言ったのは数十人の女子。まるで主人を迎えるメイドのようだ。

「おはよう」

そう淡泊に返事をすると、駆け足で右京は校舎の中に消えていった。

「相変わらずだなぁ」

そう俺は発した。毎朝続くこの異様な光景にもすっかり慣れてしまった。

彼女達は右京のファンクラブ
「右京様を見守る会」
の会員達だ。もちろん非公式だが、様々な活動をしている。

その一つに朝の挨拶がある。彼女達は毎朝7時に学校に集まり、ミーティングを済ませた後、右京をグランドでじっと待っているのである。

「なんだ少年、羨ましいのか？」

「現実離れした光景に圧倒されているだけだ」

「少年には我が居るから安心したまえ♪」

「さよですか」

そう俺は言うと校舎に向かって歩みだした。

「いわゆる放置プレイというやつか？このような趣味をいつ持ったのだ少年？」

「他人に聞かれると誤解されるだろう！さっさと歩け」

「了解した」

デジャヴュだ。

馬鹿馬鹿しいやり取りをやっていると突然声が響き渡った。

「楓君おはよう♪」

その挨拶が合図となって楓の周りには数十人の女子が取り囲んだ。

「おはよう諸君。今日もすばらしい天気だな」

「キャー、朝からカッコイイ」

俺の頭にはハテナマーク。何故天気が良いと言っただけでカッコイイのだ？

「では、教室に向かいたいので道を空けてくれないか？」

「うん♪」

楓がそう言うと女子達が不満の色を見せつつ道を空けた。

「行こうか少年」

「ああ」

俺は返事を返すと楓の横に並び歩みだした。

「どうした少年？羨ましいのか？」

「現実離れした光景に圧倒されているだけだ」

「少年には我が居るから安心したまえ♪」

「さよですか」

そんなやり取りをしながら俺と楓は教室に向かった。

第４話ー光景ー

「おはようクラスメート諸君！」

開口一番、教室に響き渡る声。

「おはよう楓君」

「オッス楓、今日も無駄に元気だな」

それはいつもの風景。楓は必ず教室全体に響き渡るように挨拶をする。そして男女問わず教室に居る者は彼に挨拶をする。

「うむ、今日も良い返事に感謝する」

満足気にそういうと楓は自分の席に着いた。楓が席に着くとものの数秒で女子が取り囲む。いつもの風景だ。

「ついでに伸もおはよ」

「誰がキャラメルのおまけだって？」

俺は少し荒れ気味に言うと席に着いた。

「少年、男のジェラシーはかっこ悪いぞ」

そう発したのは隣の席に居る楓だった。席までも隣とは運命か嫌がらせかどちらかだ。

「誰のせいだ！」

「宇宙人か？」

楓はシラっと言い切った。本当に何も解っていないようだ。

「宇宙人みたいなやつが悪い」

「是非その人を紹介してくれ少年！」

「案外お前の知ってる人物かもな」

俺は皮肉をこめて言った。しかしながら楓は全く気付かない様子だ。

「もう、楓君いじめるの止めなさいよ」

そう言って俺の話に割り込んできたのが夏花だ。

「夏花ちゃんおはよう♪」

「おはよう楓君」

「我は少年にいじめられていたのか？」

「質の悪いいじめよ、伸に近寄らない方が良いわよ」

「って待て！俺が悪人みたいじゃないか！」

「あら、居たの？」

夏花はそう言うと席に着いた。ちなみに楓が俺の右横の席で、夏花が左横の席である。

そのためこの話の下りが終わるのは朝のホームルームが始まるまで続くであろう。

「全く、朝から気分悪いぜ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。私は伸を助けたのよ？このまま話が続けば楓君の親衛隊に何されるか解らないでしょ？感謝はされても恨まれることはないわよ」

夏花はニヤリと笑い、してやったような顔をした。

「ぬっ、今度は少年がいじめにあうのか？」

「形勢は不利だ。状況を打破するため睡眠モードに入る」

そう俺は言うとタヌキ寝入りをして時が過ぎるのを待った。

「全く伸っていつもバツが悪くなると寝るよね」

夏花は呆れたように言うと隣の女子と談笑を始めた。

楓は相変わらず女子に囲まれている。

この光景も見慣れたものだ。

第5話ー前兆ー

「さっさと席に着けよ」

担任の連条静(れんじょうしずか)が少し怒ったような口調で言った。

静は美人ではあるが、男勝りの性格で

「鬼静」

(おにしず)と男子生徒から言われている。無論本人を目の前でそのあだ名を言ってしまうと翌日の朝は歯ブラシを持てないと言われている。

「席に着いたか？ならさっそくだが風紀検査といこうか」

「ギクッ！」

そのあまりにもわざとらしく声を上げたのは右京だった。

「そりゃそうだよな右京？おまえの頭は純粋の日本男児の色じゃないもんな」

「これは祖父の遺伝でして。。」

「ほぅ、ついこの前までは黒だったのにいきなり茶髪になるのか？」

「さぁ、なんででしょうね？」

右京が見苦しい言い訳を言っていると、横から楓が助け船をだした。

「ティーチャー！同志右京が嘘を言うと思ってるのか！見損なったぞ！」

それは普段温厚な楓とも思えない言い方だった。

「楓、おまえが熱くなるなよ。先生、明日直してきますから」

右京が気まずくなった場を一言で断ち切った。

「約束したぞ右京」

そう静は言うと、不機嫌な様子で教室から出ていった。

「ありがとな楓」

右京は小さな声でそう言うと、笑みを浮かべた。

「友をかばうのは当然のことだ、気にするな同志」

楓は笑顔でそう言った。

「天気も良いし、一限目からサボりますか。楓と伸もどうだ？」

「了解した」

「ったく。夏花、先こーには三人とも保健室に居るって言っといてくれ」

「テスト大丈夫なの？」

「俺には山勘の神がついているから心配するな」

おれはそう言うと二人と共に教室から出た。

なんでもないいつものこの行動が俺たちの絆に亀裂を入れることになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9417a/

ダブル

2011年1月20日01時40分発行